

横山又次郎著『世界の反響』に描かれたケンペルとナウマン

矢島道子

東京成徳学園

Kaempfer-Naumann-Yokoyama

Michiko Yajima

Tokyo Seitoku Gakuen, Tokyo114-0003 (m-yajima@hi.tokyoseitoku.ac.jp)

はじめに

ふとしたことから、横山又次郎著『世界の反響』という本を手にした。横山又次郎 (1860-1941) は生涯に多くの著作をなした人であるが、上記のような著作があることはほとんど知られていない。そして、この書にエドムンド・ナウマン (1850-1927) とエンゲルベルト・ケンペル (1651-1716) にまつわる小さな話を書いてあった。化石を研究している人々のために、これは後世に伝えておきたいと思い、再記する。

『世界の反響』は大正14年1月25日早稲田大学出版部から発行されている。横山64歳くらいの時の著作である。当出版部は横山の多くの著書を出版している。本書は大きさが10cm×17cmで厚さ3cm、683頁の小さな本である。表紙は紺で「身長80尺の大怪物」すなわちディプロドクスの線画が載っている。奥付には「出版会承認、庫い3484号、230部」と書いた付箋がついている。

公衆用の本—横山の著作の方針

横山は『世界の反響』の序で彼の著作の方針を語り、『世界の反響』の位置づけを明記している。現代かなづかいにして、以下に再記する。

「私は久しい前から著述をしていますから、今日までに世の中に出た本の数が大小合わせて50からになっています。もっとも中で、古いもので詰まらぬものは、皆滅亡してしまいました。これらは自然の運命ですから、惜しくも何ともありませんが、彼の大地震の火災に遭うて滅亡したのが数本あります。これは少々早死であったかと思いますが、しかしこれとてもさして惜しいという程のものではありません。その他に至りましては、幸いに今尚生存しています。これはその発兌元と印刷所とが焼けなかったからで、私にとっては非常な幸福でした。その理由は、この生存書は皆割合に新しいもので、私一個の考えでは他に比してやや価値あるものと思っているからです。これらは総しよ三十部を越えています。

この三十部の書を私自身は (一) 専門家用、(二) 学校用、(三) 公衆用の三類に分けています。

第一の専門家用というのは、私が専門としている学科に

関する研究事項を書いたもので、これは広く世界に知らせたいとの希望から、皆欧文で書いてあります。部類は今合わせて二十ばかりになっていますが、今後なお殖える見込みです。

第二の学校用というのは、高等学校もしくはそれ以上の程度の学校の学生の参考書として著したもので、今十部を少し越えています。これも今後なお少しは殖えるかも知れませぬ。

第三の公衆用というのは、私の専門とする学科もしくはこれに関係した諸学科の事柄を通俗的に書いて、一通りの教育ある人々には判るように書いたつものものです。今度出ましたこの『世界の反響』も即ちその一で、部数は今日生存しているものはいくらかありませぬ。しかし今後出来るだけ殖やしたいと考えています。

そこで、何故かように三様に著述をするかと申しますと、これには私に一種の抱負があるからです。

私は世の中に科学者として身を立てている者ですから、科学上の研究をして、その結果を世に発表するのはいわば私の本分で、何も怪しむに足りませぬ。

次に、私の考えでは、科学者が科学上の研究をして、その結果を世に発表するだけでは、少し物足らぬではないかと思っています。現に私は久しく教職にいましたから、学生に教えるということも私の本分の一となっていました。

学生に教えるには、講釈にばかりよらずに、本を書いてこれにあてがうということも必要だと認めました。その理由は、そうすれば講釈に漏れたことも学生が知る便宜を得ますのみならず、講釈を聴くことのできない他の学生も、また私の講釈と同じようなことを知る便宜があると思ったからです。

終わりに、私はあまねく吾が国の学生の便宜を計るくらいなら、もう一步を進めて、我が同胞全体の便宜をも計ってはどうかと考えました。ご承知の通り今日は科学の世の中で、科学の盛んな国は栄え、そうでない国は枯れるという次第です。科学を盛んにするには、その価値を国民に知らせるのが最も近道です。これが即ち第三類の書ある所以です。

以上は私の抱負に過ぎませぬので、私の著述が何程世間を利するかは別問題です。或いは利益に全くならないかも知れませぬ。よし又あっても、それは真に徹々たるものでしょう。しかしこれは止むを得ませぬ。僅かに一人の努力

では、余程の豪傑でない限り、大したことのできるものはありません。

以上私の著述の棚卸しを以てこの書の序文に代えておきます。

『世界の反響』の後尾には、横山又次郎著『世界奇聞知識の庫』とか『珍談百一篇』とか『世界の奇観』などの、横山のいう第三類の本の広告が並んでいる。これらはまだ入手していない。

『世界の反響』の構成

目次には以下の40項目が並んでいる。4, 6, 7, 8, 11, 20, 22, 27, 28, 30, 32, 38, 40項目以外は小項目にわかれている。

1. 人間以上に子煩悩な動物, 2. 犬は家畜の長, 3. 食いしん坊の白熊, 4. 蟻の戦争, 5. 蜜蜂の魂, 6. 虫を射落とす魚, 7. 岸に這い上がる魚, 8. 西洋人の心に浮かんだ奇動物, 9. 蜃気楼, 10. 世界自慢くらべ, 11. 曲げられる岩石, 12. 怪巨獣の探検, 13. 鳥に似た爬虫, 14. トーテムの奇習（口絵はカラーでコロンビアのトーテムが描かれている）, 15. 地質時代の指針は化石, 16. 化石採集案内, 17. 現在知っている人類と類人動物, 18. 人が猿かまたは間の子か, 19. 日本南アルプスの初踏査, 20. 二万五千年前の土製の獣類, 21. 氷山の生と死, 22. 一時に海中に沈没したという大陸, 23. 世界最高の称ある潮, 24. 歩測に用いる歩の長さ, 25. 地質時代の水陸の分布と気候, 26. 古生代の氷河, 27. 玻璃質隕石テクタイト, 28. 何故に岩石は山に疎で海底に密か, 29. 地下の熱, 30. 大地震の招いた奇跡, 31. 地震の原因, 32. 東京の地質, 33. 地殻は何故動くか, 34. 世界政策の要具となった石油, 35. 白石炭と地理的条件, 36. 未来の燃料と動力源, 37. 火星の正体, 38. 星の一生, 39. 維新前に蘭人と共に渡来した学者, 40. 世間に見放された薄命者。

「地殻は何故動くか」ではもちろんウェゲナーの説を紹介しているし、「未来の燃料と動力源」では原子力発電を予測し、「世間に見放された薄命者」ではフランスの文学者の紹介したらい病患者の生涯を翻訳している。これらはい病史の研究でも珍しい資料となっている。ケンペルとナウマンの話は「維新前に蘭人と共に渡来した学者」のところに書かれている。

横山の書いたナウマンとケンペル

横山は「維新前に蘭人と共に渡来した学者」のところで、ケンペル、ツンベルク、ティッチング、ドフ、フィツシャー、メイラン、シーボルトを紹介しているが、そのケンペルの紹介のところで、以下の文章が出てくる。

「ケンプフェルが將軍の御覧に入れた踊というのは如何

なるものであったか、今日には傳わっていないが、此の事は西洋人の頭をよほど刺激したと見えて日本に来る西洋人の能く言うことである。それに就いて、ここに面白い話がある。明治18年であったかと思う、農商務省地質調査所の技師長をしていたナウマンという独逸人が満期帰国するに際して、氏の指導を受けた吾々一同は氏を両国の亀清に招待して、送別の宴を開いた。その時恰も回向院には相撲が始まっていたから、吾々の中の相撲好きの一人が大達と柏戸の二関取を呼んで来て、宴の取り持ちをさせた。すると関取は例によって相撲甚句を踊り出した。するとナウマン先生は自分も一つ踊って見ようと言って、座敷の一方に突っ立って、両手 を腰に当て、且つその肘を突っ張らして、左の如く言って踊った。

オランダ、キンライ（近來か）、滑り足、滑り足、滑り足、ジャンガホースイジャン、ジャンガホースイジャン

オランダ、キンライ、重ね足、重ね足、重ね足、ジャンガホースイジャン、ジャンガホースイジャン

オランダ、キンライ、もちり足、もちり足、もちり足、ジャンガホースイジャン、ジャンガホースイジャン（ジャンガホースイジャンとは月琴の流水の譜中の一節である）。

滑り足の時には滑る真似して飛び、重ね足の時には一方の足を他の足に乗せて然る後飛び、もちり足の時には左右の足を交叉して、然る後飛び跳ねた。

之を見た一同は皆腹を抱えて大笑した。そしてその踊りの由来を聞くと、先生の言うには、是は自分が伊予の宇和島に出張した時、土地の藝妓を揚げて宴を張ると、その藝妓が自分の外国人なるを看て、そういうものを踊って見せたが、察する所、昔ケンプフェルが將軍の面前で踊ったという踊りはこんなものであったかも知れぬと言った。その真偽は別として、長崎ならば兎も角、宇和島にそんな踊りが傳わっていたことは、すこぶる奇とするに足る。もっとも宇和島の殿様中には蘭学熱心者もあったとの事である。」

以上である。

まとめ

ケンペルが第1回参府（1691）の際、江戸城内で將軍綱吉に謁見した時の様子を伝えるケンペル自筆のスケッチ『將軍綱吉の御前で謁見する図』は諸書に転載されてあまりにも有名である。ケンペルは綱吉の命令でヨーロッパの踊りやドイツ語の Aria を披露したという。その踊りが宇和島に保存されていたとはとても思えないが、大変おもしろい話である。そして、その踊りをナウマンが学んで、横山に披露したのだから、歴史というものは、こんなものなのかと思うことが多い。なお、今のところ、宇和島地域にこのような踊りが現在も伝わっているとは聞き及んでいない。

（2002年10月24日受付，2002年11月13日受理）